

1. 実習の目的

宮城学院女子大学学芸学部人間文化学科では、2024 年度にインドでフィールド実習をおこなった。その様子について紹介する。インドの実習としては 7 回目になる 2024 年度の実習は、12 月 15 日～29 日の 15 日間にわたり、1 年生 5 名、2 年生 3 名、3 年生 4 名、4 年生 2 名の 14 名の学生が参加しておこなった。本実習の目的は、ウッタル・プラデーシュ州にあるヒンドゥー教の聖地ベナレス（ワラーナシー、ヴァラナシ）で調査実習をおこなうとともに、インドの首都であり、北インドの中心都市であるデリー、イスラム教の聖廟タージ・マハルのある街アグラ、ラジャスターン州の州都であり、藩王国の中心地であったジャイプールの街という異なる文化背景をもつ都市を訪れ、世界遺産を実際に見ることにより、南アジアの文化や社会についての理解を多面的に深めることにあった。本実習では、14 名の学生が 3 つのグループに分かれ、インド実習事前指導の授業で、信仰観、食文化など、興味あるテーマを設定し、英語のアンケートを作成した。ベナレスで、調査実習をおこない、そのさいに、現地の学生に調査補助をしてもらい、同世代の学生との交流もはかった。

2. デリーでの交流会

12 月 15 日午後に仙台駅に集合し、新幹線と京急で移動し、羽田空港近辺のホテルで前泊した。16 日昼の飛行機でデリーに向かい、夕方、デリーに到着した。17 日は、ラクシュミー・ナラヤン寺院を訪れ、11 時から 13 時半まで、国際交流基金の日本広報センターで、日本語を学ぶ受講生たち 10 数名と交流会をおこなった。アンケートやインタビューを実施したのち、折り紙を教えたり、日本のお菓子を食べてみたりして。予定時間を過ぎても交流は続いた。昼食でインド料理を食べた後、15 時から、インド国立博物館とインド門を見学した。インド国立博物館では、ヒンドゥー教や仏教の彫刻や美術品に魅了され、メ

モをとりながら、熱心にみてまわる学生たちの姿がみられた。



3. ベナレスでの調査実習と交流会

18日の午前中の飛行機で、ベナレスに移動した後、釈迦が最初に教えを説いた初転法輪の地であるサルナートを訪れ、仏塔などの仏教遺跡やサルナート博物館を見学した。19日～21日は、バナーラス・ヒンドゥー大学（以下、BHUと略記）の大学内やショッピング・モールなどで、グループごとにアンケート調査をおこなった。そのさいに、BHUの日本語学科のアナンタ・プラサード先生の協力を得て、日本語を学ぶ学生たちに、調査補助をおこなうチューターとして、各グループ3～4人ずつについてもらった。

21日の午後は、ガンジス・クルーズをおこない、サリーなどの買い物をしたり、ベンガリー・トーラーなどの小道を散策したりした。夜は、ガンジス河でヒンドゥー教の礼拝をボートから見学し、学生たちは、沐浴場（ガート）の幻想的な雰囲気を楽しんでいた。

22日は、それぞれのグループで、チューターさんとともに、ショッピング・モールやアッシー・ガートなどで調査をおこない、その後、アンケートの記述についてチェックをおこなった。夜には、お世話になったアナタ先生やチューターさんたちを招いて、ミン・ガーデンという中華料理の店で、交流会をおこなった。学生たちはサリーに着替え、チューターさんも民族衣装で着飾り、食事を楽しんだり、プレゼントを交換したりとにぎやかな交流会となった。最後は、別れを惜しんで、涙を流す学生もあり、感動的な交流会となった。





4. 世界遺産見学

23 日の昼の飛行機で、ベナレスからデリーに向かい、バスで約 6 時間近くかけて、アグラに移動した。

24 日の午前中に、世界遺産であるアグラ城とタージ・マハルを見学した。学生たちは、ムガル時代の壮麗な建築とインド人観光客の多さに圧倒されていた。昼食後、バスでジャイプールへ 6 時間かけて移動した。ジャイプールは、ラジャスターン州の州都であり、かつてマハラジャ（藩王）が統治した街として知られている。25 日の午前中は、シティ・パレスや天文台などを巡り、マハラジャのつくった街のきらびやかさと、イスラム教とヒンドゥー教の 2 つが混交した美しさを堪能した。昼食後、風の宮殿や旧市街でのバザール見学とショッピングを楽しんだ。

26 日は、マハラジャ気分、象に乗って、世界遺産のアンベール城を観光し、ジャイプールの名産であるハンド・プリントの作業工程の見学をおこなった。ショッピング・モールで昼食後、旧市街のバザールを見学し、夜は地元の民俗舞踊をみながら夕食をとり、最後には一緒に民俗舞踊を踊って楽しんだ。27 日の朝からバスで 6 時間かけてジャイプールからデリーに移動した。夕方に雨が降ったので、ホテルでグループごとに、アンケートの整理やまとめをおこなった。28 日は、お土産屋で買い物をしたあと、夕方の飛行機でデリーを飛び立った。29 日朝に羽田に到着し、昼頃、仙台に、無事、帰着した。



5. 実習のグループ活動内容

今回、調査実習をおこなったベナレス(Benares)は、ヒンドゥー教の聖地として有名な宗教都市である。

数千年の歴史をもち、世界中から観光客が訪れる観光都市であるとともに、人口 160 万をこえるウッタール・プラデーシュ州東部の政治・経済の中心地である。ベナレスは、古代ではカーシー(Kashi)と呼ばれ、イギリス植民地統治時代にはバナーラス(Banaras)、近代以降はワーラーナシー、ヴァラナシ(Varanasi)と呼ばれるなど、呼び名や表記の方法が異なる。ベナレスは、日本人特有の呼び方である。

学生たちは、BHU のなかにあるヴィシュワナート寺院の中庭や大学構内、またヒンドゥー教寺院、ガート（沐浴場）、ショッピング・モールなどでアンケート調査やインタビューをおこなった。調査対象者は、学生だけでなく、観光や巡礼にやってきた人々、ベナレスに暮らす市民など様々で、年齢層も 10 代～70 代まで多岐にわたる。チューターさんが熱心に手伝ってくれ、各グループとも約 100 名の方々にアンケートをおこなうことができた。調査実習中は、毎晩、リーダー・ミーティングをおこない、グループごとに、その日の活動報告と翌日の活動予定について報告をおこない、引率教員がコメントをした。

各グループのテーマと内容を簡単に紹介する。3 年生 1 人、2 年生 1 人、1 年生 2 人で構成された A グループは、「インド人の信仰観、死生観」をテーマとして、2004、2012、2016 年の調査と比較して、主にヒンドゥー教徒の信仰に対する考え方や聖なるガンジス河に対する思いへの変化について検証した。

3 年生 2 人、2 年生 1 人、1 年生 2 人の B グループは「インド人の美、化粧」をテーマに、調査をおこなった。メイクや美への考え方について調査し、サロンを訪問するなどのフィールド・ワークもおこなったことで、インド女性が自然な化粧を好み、インナー・ビューティーを大切にすることをあらためて認識した。4 年生 2 人、3 年生 1 人、2 年生 1 人、1 年生 1 人の C グループのテーマは「インド人の食文化、デリバリー」で、2012、2016 年の調査報告と比較することで、コロナ禍を経て、食に対する意識やデリバリーに対する需要がどう変化したかを調査した。帰国後、インド実習中間報告会をおこない、各グループがアンケート調査やインタビューの内容を報告した。現在、アンケート調査やインタビューをまとめ、考察を加えた『2024 年度インド実習報告書』を作成中であり、各グループの成果に期待したい。

実習をつうじて、学生たちは同世代のチューターさんや現地の人とふれあい、貴重な経験をすることができ、インドの社会や文化についての理解が深まったと思われる。日を追うごとに、チューターさんに頼

らず、自分で英語を使ってアンケートをおこなうように頑張ったり、地元の人たちとコミュニケーションをとるようになったりと、学生たちの成長を実感できた。1年生から4年生までの学生が参加した実習だったが、だんだんと仲良くなり、互いに協力しあって実習をすすめる様子がみられた。帰国後、「インドにまた戻りたい」「ベナレスに留学したい」という学生たちも多く、かなり充実した実習になったと思う。

引率に同行してくれた杉井信先生の的確なサポート、国際交流基金の日本文化センターの鈴木千晶さん、澤木翔さん、日本語講座受講の学生のみなさん、BHUの日本語学科のアナンタ・プラサード先生の多大なご協力、チューターをつとめてくれたBHU学生のみなさんの真摯な取り組み、また、ガイドのバリック・ショービー氏をはじめ、友人のミントウ・マノージ氏、休みをとって駆け付けてくれた卒業生2人などのおかげで、実習がスムーズにすすんだ。あらためて感謝を申し上げたい。学生たちには実習の体験を生かして、さらに異文化理解をすすめてほしいと願っている。



インド実習では、目で見て、体験して、心から感じる事が本当にたくさんあった。特に印象的だったのはガンジス川だ。沐浴をする人々、祈りを捧げる巡礼者、祭りのような宗教儀式、さらには火葬場の光景までもが広がるこの川は、生きる人にとっても、亡くなった人にとっても、人々が思いを馳せる神聖な場所であった。一方で、川の遠くからバイクのクラクションが聞こえ、観光船が行き交い、物売りが盛んに声をかけてくる。神聖でありながらも混沌としたその空間は、まさに「清濁併せ呑む」ガンジス川そのものだった。雑多で、エネルギーに満ちた風景がとにかく面白かった。

街も賑やかだった。市民の足、オート力車での移動が多かったが、牛がその辺を闊歩していたり、信号待ちをするラクダを見かけたりすることもあった。朝から夜まで活気づく街の様子に、インドの活力を感じた。見渡す限りすべてが私たちに新鮮に映り、歩くだけでも楽しかった。

この実習の一番の目玉は現地の学生との活動だった。BHUの学生たちと一緒に、ニュー・ヴィシュワナート寺院の前でアンケート調査を行った。現地の人々と直接話し、学生だけでなく、近所に住む人、旅行中の家族など、さまざまな人と交流できた。驚いたのはインドの人々のフレンドリーさだ。声をかけるとほとんどの人が笑顔で応じてくれ、お互いのことを話したり、一緒に写真を撮ったりした。印象的だったのは、「家族全員で写真を撮りたい」と言われて承諾したところ、なんと20人ほどに囲まれた場面だ。その家族は親戚一同でヴァラナシを訪れていたらしい。このようなエピソードからも、インドの価値観や文化を垣間見ることができた。

ヴァラナシでの4日間の活動は本当に濃密な時間だった。BHUの学生たちには本当に親切にしてもらい、彼らと過ごす中で、インドの文化や学生生活について多くのことを知ることができた。ヴァラナシ滞在最後の夜にはパーティーを行い、大いに盛り上がった。思い出に残そうと写真撮影タイムは終わらず、別れが本当に名残惜しかった。テスト期間にもかかわらず、たくさんのサポートをしてくれたBHUの学生には心から感謝している。

大学生活の最後にこのインド実習に参加できたことを本当に幸運だと思う。ひとりで訪れても経験できないようなディープな体験ができた。学生のうちにインドを訪れ、自分の目で見て、頭で考え、肌で感じられた経験は本当に貴重で、これからの人生にも生きてくるだろう。また必ずインドを訪れたい。スパイスたっぷりのアツアツのチャイを飲みながら、ガンジス川の日の出を眺める日を心待ちにしている。

最後になるが、この貴重なインド実習に私たち学生 14 人を連れて行ってくださった八木先生、学生の学びや健康を第一にたくさんのサポートをしてくださった杉井先生に、心から感謝している。また、現地での 13 日間、私たちをさまざまな場所に案内し、多くのことを教えてくださり、学生のケアもしてくださったガイドのショービーさんにもお礼を申し上げたい。この実習に関わってくださったすべての皆さんに感謝し、この文章を締めくくる。

インド実習は、私たちを大きく成長させ、人生においても忘れられない学びを与えてくれました。ありがとうございました。

